

総合的な学習の時間と特別活動

—人生と社会に真向かう時間の創造—

宮田 雅己

はじめに

高校の教育課程に、それまでの各教科と特別活動に加え、「総合的な学習の時間」（以下、「総合の時間」）が加わったのは、1999年の学習指導要領改訂からであり、2003年度入学生（1988年生まれ）から、週1～2時間（卒業までに3～6時間）履修することになった。各教科と異なり教科書がなく、学習の目標も内容も各学校で定めるといふ「総合の時間」の特殊性は、多くの高校教師に違和感を感じさせ拒否感を抱かせたが、その一方で、学校ごとの授業の自由が認められる点に、授業準備の苦労は予想されるが可能性とやりがいを見いだした教師もいた。

「総合の時間」は、2018年で15年目となるが、当初の違和感や拒否感にもかかわらず、教育課程に安定的にその座を占めてきたように思われる。しかし、「総合の時間」が本来持っている授業準備の大変さは、教育産業の用意する模擬試験を含む「総合の時間」授業のパッケージを丸ごと購入する学校を生み出してもいる。

2018年の高等学校学習指導要領では、「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」と改称されたが、これまでの「総合の時間」同様、学習の目標と内容が各学校で定められる点は変わっていない。文部科学省は、総合的な学習と総合的な探究の違いについて縷々説明しているが、各学校で積み上げられてきたこれまでの「総合の時間」の土台の上に新たな「総合的な探究の時間」を構想せざるを得ないのが、おそ

らく高校現場の実態となるだろう。本稿は、今後実施される予定の「総合的な探究の時間」と「特別活動」の関係の作り方と指導方法のあり方をさぐるために、これまで現場で積み上げられてきた「総合の時間」を振り返り、「総合の時間」と密接な関係にある「特別活動」との関係のあり方や指導方法について検討することを目的としたい。

1、「総合的な学習の時間」をどう創るか

（1）「総合的な学習の時間」と「特別活動」の目標

文科省資料によれば、「総合の時間」が教育課程に登場するきっかけとなったのは、1996年の中教審「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」（第1次答申）とそれをうけて出された1998年の教育課程審議会答申「総合的な学習の時間の創設の提言」だった。そこでは、「各学校が創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開できるような時間を確保」「社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成するために教科等を超えた横断的・総合的な学習をより円滑に実施するための時間を確保」することが設置理由とされていた。ここには、当時盛んに主張されていた「個性化」や「多様化」といった教育言説が背景となっており、ともに、現在叫ばれているほどではないが、先の見えない社会変化に主体的に対応できる人材の育成という課題意識があったということができ

よう。

私自身も、高校入試選抜によって生徒が進学校・中堅校・困難校と振り分けられるにもかかわらず、各校の教育課程がほぼ同一であるという現実には違和感を持ち、それぞれの高校の生徒実態に合わせた教育課程の創造こそ模索されるべきだと主張していた。¹⁾ その点で、各校で創意工夫と特色を生かした教育活動を創り出せる「総合の時間」には大変魅力を感じたし、「総合の時間」には、「総合の時間」創設以前に「特別活動」のホームルーム活動として各クラス担任が創意工夫してきた様々な取り組みを受け入れる時間としての可能性もあったから、そこへの期待も大きかった。その可能性は以下に示す「総合の時間」と「特別活動」の学習指導要領上の目標の近似性に見ることができる。

2009年告示 高等学校学習指導要領より

第4章 総合的な学習の時間

第1 目標

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探究活動の主体的、創造的、共同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする。

第5章 特別活動

第1 目標

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸張を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

このように、「総合の時間」では、生徒が自主的探究的に学習する中で自己の在り方生き方を考え、「特別活動」では、集団活動や人間関

係の中で人間としての在り方生き方を自覚するというように、在り方生き方を探究する点で一致点を持っている。事実、その後の各校での「総合の時間」の実践では、多くの学校で「総合の時間」導入前に「特別活動」の時間を使って行なわれていた在り方生き方に関する学習を「総合の時間」が引き受ける形で、「特別活動」とつながっていったように思われる。

(2) A高校での「総合的な学習の時間」の3年間

私が勤めた川崎市内の進学校A高校の「総合の時間」の3年間を紹介する。どの高校でも同様だと思うが、「総合の時間」は、「各教科・科目」での学習と「特別活動」とりわけ学校行事や在り方生き方と直接的に関わる進路指導と関連づけつつ進めることにした。また、高校生は各学校の文化の中で学年進行に沿って自己形成するから、高校1年は「〇〇高校生になる」、2年生は「〇〇高校を担う」、3年生は「〇〇高校からそれぞれの進路へ」というテーマ設定で「総合の時間」を準備した。

その結果、「総合の時間」の担当は、在り方生き方に関わる校内分掌としての進路指導部が指導権を発揮しつつ、実際の指導は学年教員団で行なう学校が多くなるのだが、私の勤務校でも進路指導部に属していた私を中心に学年教員団内で「総合の時間」係を作り、3年間の「総合の時間」を運営していった。

1 学年

A高校では、年度当初に「総合の時間」とロングホームルーム（以下、LHR）の年間計画を進路指導部と生徒会部の協議で作上げる。以下月を追って振り返りたい。

まず、4月には、某教育産業の模擬試験を「総合の時間」を使って実施する。模擬試験は進路指導の一部として「総合の時間」のスタートとなる。また、4月は学校行事としての文化祭、体育祭、合唱コンクールなどに向けた準備の時期ともなっているため、4月5月は、「総合の

時間」はLHRと調整しながら、学校行事の準備の時間としても使われる。

4月が終ると学年集会の形で「スマホ・携帯」講座がある。SNSを通じての外部の大人とのやり取りや校内の生徒同士のトラブルなどが問題化する現在、スマホ・携帯会社の社会貢献活動の一環としての学校への派遣講演を総合的・探究的学習という位置づけで実施する。こうした外部講師を招いての講演会では、必ずワークシートを用意し、生徒にはメモをとり、講演を受けての感想作文を求める。クラス担任はそれを集めて、学期末の「総合の時間」の評価に反映することになる。「総合の時間」の評価は、数値評価ではなく、生徒の取り組み状況と結果についての文章による評価となっている。

6月は教育実習期間となる。A高校を卒業した大学4年生が実習生として来校する。3週間の実習期間のうちの「総合の時間」に、「大学生講演会」と銘打って学年集会を実施する。実習生一人ひとりの大学での学び、大学選びで考えたこと、高校時代の生活経験を語ってもらう。生徒たちは、先輩実習生の語りから「A高校生になる」ことの意味をさぐるのだ。「総合の時間」系の教員は、1校時という短い時間で複数の実習生に意味のある語りをしてもらうために「大学生講演会」の前に、実習生に集まってもらい予備討論とリハーサルをなどの準備を行った。

7月になると翌年の授業選択についての説明会が実施される。授業選択は自分の在り方生き方に直結することなので、「総合の時間」の内容となる。

秋になるとA校の1年生は「社会人出張講義」を受講することになっている。企業・NPOと学校との橋渡しを目的とするキャリア学習支援を行なう団体に依頼し、企業やNPOの方々10数人に来校していただく。生徒は、希望によりグループに分かれ1時間ずつ2人の講演を聴く。名だたる大企業の方、アミューズメントパークの方、世界の女性教育推進団体の

方々が、職業生活での自身の経験や学んだこと、高校生に期待することなどを話して下さる在り方生き方探究の貴重な時間となる。生徒が、感動を持って話を受け止めるのが、A校での恒例となっている。各グループでの話が、その後クラスで交流され、共有されることになる。

10月には修学旅行の裏番組として遠足が実施される。班別自主行動の形で、班毎に見学計画を立て、実施後には壁新聞作成の形で見学報告をする。壁新聞は、一斉に廊下に貼り出されコンクールが実施される。

12月になると、課題研究が始まる。1学年のテーマは、2学年で予定される修学旅行に向けての研究である。私が担当した学年は、福岡・佐賀・長崎をエリアとする修学旅行であったから、北九州地域の社会・経済・文化・歴史などが研究対象となった。

問題は、生徒の研究方法である。ITCの発達で、高校生はともするとインターネットでの調べもので事足りると考えるようになってきた。こうした状況の中で私たち学年クラス担任団は、この傾向への抵抗を試み、以下のことを生徒に求めた。

- ①必ず書物(本)を1冊読み、その内容をA4用紙5枚にまとめて提出する。
- ②「総合の時間」を何時間か使い、図書室で本を探す。

私たち教員は図書室で生徒を待ち受け、司書とともに本探しの支援をした。また図書室に適切な本がない場合は、学校のコンピュータや生徒のスマホから川崎市立図書館・横浜市立図書館・県立図書館の検索システムにアクセスし本を探した。また、進学校であるA校でも本を読む研究は面倒くさいと思っている生徒が多いので、私たちは、本を読んで調べるのが面白いことだと知らせるための教員のパフォーマンスを学年集会の形で実施した。クラス担任から2人が、参考文献を示しながら「長崎の地理」「長崎の歴史」の調査発表を行なった。

こうした働きかけの結果、私のクラスの生徒

の研究テーマは表1)のようになった。出来の良し悪しはあるものの、A4用紙5枚の報告書をそれぞれ作成し、3時間に渡り、「総合の時間」を使いクラス発表を行った。提出された報告書は、私がテーマ毎にまとめて教室に置き、お互いの報告書を読めるようにした。

2 学年

2 学年の「総合の時間」は、年度当初から秋の修学旅行に向けての準備活動が中心となる。生徒は旅行での班別自主行動やクラス別自主行動などの行程の下調べを6月までに進める。

7月になると、3 学年での選択科目説明を含む進路学習が何回か続く。学校作成の「進路の手引き」で、先輩たちの進路結果の確認や先輩の進路決定や進路実現のための努力の仕方や経験を学ぶ週、各教科の教員からの選択科目内容の説明会の週、予備校から講師を招いて大学の学部学科説明を受ける週、学年クラス担任団の何人かがパネリストとして登壇し、自分の学部

表 1)

九州の方言	ハウステンボス	蘭学
戦艦武蔵	坂本龍馬	軍艦島
戦艦武蔵	トルコライス	九州の方言
九州の方言	外国から入って来た食	トマス・グラバー
九州の方言	ゆるキャラ	九州の方言
核融合	長崎の食とサツマイモ	八幡製鉄所
長崎の具雑煮	オスプレイ	地熱発電
水族館の歴史	原爆投下	江戸時代の西洋医学
蘭学の歴史	火山活動	長崎の食べ物
オスプレイ	隠れキリシタン	火山活動
佐世保軍港	オスプレイ	原発
路面電車	海軍食事情	トマス・グラバー
原爆投下	カステラ・南蛮貿易	九州の方言

選択の経験や進学後の経験についての、パネルディスカッションを見る週とつづく。

大学進学に特化しすぎるきらいがあるが、全員が大学進学を希望しているA校だという前提で構想した内容だった。専門学校進学や就職を希望する生徒の多い学校では、その実態に合った形での進路指導が構想されるべきだろう。

秋に修学旅行が終ると、2 年生は、「大学出張講義」を受ける。夏休み前から、進路ガイダンス請負業者と協力し、生徒の聴講希望アン

表 2)

高校生からの選挙	シルクロードと交易	これからのまちづくり環境
気象災害	ジェット旅客機が飛ぶまで	治験
裁判について知る	日本の生物はどのように出現したのか	地球環境について私たちができること
ディズニーから学ぶホスピタリティの重要性	言葉とコミュニケーション	スポンジ生地不思議
ニーチェ哲学	“会社”とは～起業するまで～	膨大な収益を生み出すグーグルの広告システムと隠蔽の戦略
燃料電池	新国立競技場の決定と東京オリンピック	特別支援教育と発達障害について
真のクローン研究	「赤毛のアン」の世界を旅して	カルヴァンの宗教改革による経済成長
社会の今を伝える	今の学校教育について～改善の道を開こう～	闇の世界で赤ちゃんは
日本の米はなぜおいしいのか？	日常での物理学	“56 グローバル・エリート”になるために
時間とは何か	ピアノの原点～バロック時代の楽器～	英詩の古典版とは…？！
身の周りに潜む科学～レイリー散乱について～	得する経済学	世界の多様性と異文化理解
重力とは何か	リトミックによる幼児の発達	安眠と夢
いろはの起源	スポーツを知る	

ケートを実施し、その結果をふまえ、出張講義に来てもらいたい大学と学部を選ぶ作業を進める。1学年の「社会人出張講義」と同様に、2時間を使い、生徒は2つの学部・学科の講師の話聞く。

11月からの課題研究は、「大学出張講義」の刺激を受ける形で始まる。私たちの学年は、「本を読み、それをまとめる」方針を続け、1学年同様の本選びと報告書作成・報告内容発表会を組んだ。1学年では、修学旅行をテーマとしたが、2学年は、表2)のように学部・学科での研究を意識した一人ひとりの課題意識に応じたものをテーマとした。

3 学年

3学年は、進路選択と進路実現が現実として迫る時期である。1学期は、進路指導のための学年集会や予備校の方を頼んでの受験動向の説明会を実施した。ただ、この年は18歳選挙の第1回にあたる参議院選挙を7月に控えた年だったため、「総合の時間」、4時間を使って主

権者教育・シティズンシップ教育を行った。

具体的には、総務省作成の『私たちが拓く日本の未来』を利用し、国政選挙の仕組みや参政権実現の歴史、参政権行使の意味などの説明をクラス担任が行なった。そして、生徒を班に分け、班毎に担当する政党を分担し、各政党の各分野の政策を調べ発表させた。生徒は、自分の担当した政党の自分の担当した分野の政策を、A3版の紙に書き込み、廊下に一斉に貼り出した。

生徒はこの政策一覧を参考にしながら、模擬投票を行なった。投票実務は生徒の選挙管理委員会が担当し、本物の投票用紙と本物の投票箱を区の選挙管理委員会から借用して投票所を開設し、投票立会と開票作業に従事した。

9月から最後の課題研究に移った。受験勉強で精神的に余裕のない生徒もいたが、AO入試や推薦入試をねらう生徒は、面接でのプレゼンテーション用に力を入れて調べ学習を進めていた。11月に、クラス内で発表会を行い、その後は2月の本試験の準備へと一路進んでいった。

表3)に、クラスの生徒の研究テーマを示す

表3)

世界で起こった医療殺人事件	近現代文学史・米大統領史	留学生史
鎌倉幕府と室町幕府の違いについて	化粧品のための動物実験	シンギュラリティの先へVR世界の実現可能性
日本にはポルシェ・フェラーリより速いプリウス・カローラが走る	ブラックホールについて	音楽業界の殺し方講座
日本文化の変遷と在り方について	漢文の句形について	リップクリームの選び方
ドイツ出張中	Olympic Invitation to Tokyo	次元とは
映画論	原始から江戸の教育に見る「受け継ぐ教育」と「創り出す教育」	ヒエログリフ
重力波の何が重要か	決算書	勉強がはかどる環境
バイオテクノロジーの歴史と是非	入試問題を読み解く e.i. π について及びオイラーの公式 $e^{i\pi} = -1$ の導出について	ips細胞と3Dプリンターからつくる臓器
リオ五輪開会式ユニフォーム	歴代アメリカ大統領	日中国民間関係
救急車を呼ぶ前に	全日本卓球	童話における教訓はいかに人間社会に関わっているか
宇宙の到達点	ゲーム理論の活用	農業と税の歴史
マーケティングの分野から東京ディズニーランドの成功を見る	眉	美術様式の流れカラヴァッチョとベラスケス
USJを劇的に変えたたった1つの考え方	ロウソクの科学	精神的な問題を抱える子どもの数の今と昔の変化、またはその原因について
通信の世界をのぞく		

が、自分の進路との関わりが濃いものとなっていることが分る。

(3) A高校での「総合の時間」3年間を振り返る

①「総合の時間」は、LHRの補完物

「総合の時間」のできる前は、教育課程上の教科・科目以外の時間はLHRのみで、学校行事の準備や生徒会活動・クラス活動などに時間を割り振ると、在り方生き方にかかわる進路指導についての時間が不足しがちだったことは先述した。「総合の時間」ができたことで、その部分は「総合の時間」に回せたから、LHRは進路指導以外のために時間を割けることになった。

②「総合の時間」は、学年クラス担任団の協働で創り出すもの

高校生は1年から3年へと学年を追って変化発展し、私たちはこれを成長や育ちと呼ぶが、校内での3年間の継続的な成長や育ちの伴走者は学年クラス担任団しかいない。学年クラス担任団は、生徒と授業や学校行事など様々な場所で出会い、生徒と教師の安定的な関係をつくり、信頼関係を創り出す。この信頼関係ができなければ、生活や進路などの悩みや人としての在り方生き方について話し合うことはできない。カウンセラーや外部講師など、生徒の見知らぬ大人と生徒が安心して出会えるのも、信頼関係のある学年クラス担任団の介在があってこそだ。こうした微妙な問題をも含む「総合の時間」が、学年クラス担任団の協働でしか創り出せない理由はここにある。

また、生徒は部活動・委員会活動・学校行事などでクラスを超えた横のつながりを広げ、進級のたびにクラス替えもあるので、各クラスの枠を超えた学年生徒集団ができ上がる。そこで、教師は個々の生徒への関わりとともに学年生徒集団全体に対しても働きかけなければならなくなる。そして、それは個々の教師の力量を超えることであり、学年クラス担任団の協働なくし

て働きかけは成功しない。この意味でも学年クラス担任団の協働の重要性は確認されなくてはならない。

A校の私たちの学年クラス担任団も、入学時に3年後の生徒の育ちを想像し合い語り合う中で、生徒との関わり方や指導のあり方についての共通合意を模索した。そして、教科・科目の授業やLHRや学校行事と関連付けながら「総合の時間」を構想していった。そのため、週1回の学年会以外に時宜に応じて「総合の時間」相談会を開催した。その際、学年内の進路指導部の教員が中心となり、進路指導部と学年教員団をつないだことは先に述べた。

③探究活動（課題研究）は、成功したか

A校の「総合の時間」の後半3分の1は、課題研究という名の探究活動に充てられた。1年次：修学旅行に向けて、2年次：学問研究（その1）、3年次：学問研究（その2）となっていた。修学旅行という具体物に関する研究から、自分の進路や卒業後に向けてぜひ知りたいものの研究へという意味合いを持たせていた。

課題研究を実施するにあたって、私たち学年クラス担任団が直面したのは、先に述べた生徒たちのインターネットに依存した調査研究スタイルであり、それを阻まずべく、「本」に基づく研究にこだわったことは先述の通りである。

学校や学年によっては、インターネットでの調べ学習を推奨しているところもあるが、A校での「本」で調べることにこだわった実践はどう評価されるべきだろうか。3年間クラス担任として「本で調べるのが本当の学習だ」と言い続けてきた私だったが、何人かの生徒が私の想像を超えた優れた報告書を作成したことには、本当に感動を覚えた。

また、進学校とはいえ、「本」を読まない生徒が増えている傾向は他の高校と同様だ。インターネットを使つての発表は、プロジェクターを使つてきれいな発表になるのに対して、「本を読んで紙にまとめる」報告は形の上では見劣りがする。しかし、「本」を介在することでの

生徒とクラス担任など教師との関係ができ、学問的な会話を作り出す可能性を開いた点で、A校での私たちの学年クラス担任団のとった方針は、正しい方針だったと思う。

④社会的な視野を広げる点で弱さのある「総合の時間」だった

A校は、社会的家庭的に恵まれた生徒が多く、生徒も保護者もほぼ全員が卒業後の大学進学を望んでいた。その希望を反映する形で、A校での「総合の時間」は、「進路関係」についての内容と進路を意識した「課題研究」という「過去→現在→未来」という縦軸＝時間軸にその内容が中心の「総合の時間」実践となった。

私は、A校の前に勤務したB校の「総合の時間」では、A校同様に社会的家庭的に恵まれた環境に育ってきた生徒が多数を占める中でも、自分たち以外の人々や社会の問題にも目を向けてほしいということを学年クラス担任団の共通合意として「総合の時間」実践に取り組んだことがあった。具体的には、1・2学年の「総合の時間」にNHKスペシャルなどの「お米のなみだ」「ワーキングブア」を視聴させ、社会問題を扱った。そのために、B校では、1・2学年に、課題研究の時間を設けることができなくなった。

私は、A校でも「総合の時間」に社会問題を取り入れたかったが、A校の「総合の時間」の構想にはもともとそれは含まれておらず、組み入れようとしても時間的な制約から難しかった。社会的な視野をどう広げるかがA校の今後の「総合的探究の時間」の課題であろう。

⑤教育情報産業の利用は是とすべきか

最近、教育情報産業作成の教材を購入し、それを利用して「総合の時間」を実施している高校が増えていると聞く。「模擬試験」と試験結果を利用した「模擬試験振り返りの会」や「模擬試験結果を受けての生徒面談」の実施もこの中に含まれているようだ。「総合の時間」をゼロから作り出す作業は、先述した通り教員たちに時間も手間もかけさせる。教員の多忙化解消

が叫ばれる今、多忙化解消の1つの方法として教育情報産業の利用が進んでいるのかもしれない。

しかし、当該の高校の生徒実態や課題から出発しない「総合の時間」が、果たして生徒の成長や育ちを作り出すことができるのだろうか。大いに疑問が残る。

⑥「総合の時間」実施にあたっての課題

最後に「総合の時間」実施にあたって留意すべきことを書いておきたい。

1つは、生徒集団内のマイノリティに配慮することだ。学校によって、進学希望者と就職希望者の率が異なるように、生徒は一様でない。当該校の生徒のマジョリティである層だけに焦点を当てて実践を組むと、その層に属さない生徒を疎外する。「総合の時間」の取り組みが、生徒間に分断を持ち込んだり、生徒内の少数派を孤立させてはならないのだ。

2つは、生徒への働きかけや評価の仕方の難しさである。生徒に主体的な活動をもとめる以上、生徒に対する教師の働きかけや評価は、生徒を励ますものでなくてはならない。そこで、教師の働きかけは、「よくがんばっている、よくやっている」という形にならざるを得ないのだが、同時に、生徒の活動の質を上げなければならず、質を上げるためには、生徒の弱点を指摘しなくてはならないという矛盾に突き当たる。生徒をほめつつ、批判すべき点は批判するという高度な働きかけや評価の仕方の探究という難しい課題が教師には求められている。

2、「特別活動」をどう創るか

(1)「特別活動」の目標と内容

学習指導要領では、「特別活動」は、次のような構成となっている。

「ホームルーム活動」

- (1)ホームルームや学校の生活づくり
- (2)適応と成長および健康安全
- (3)学業と進路

「生徒会活動」

- (1)生徒会の計画や運営
- (2)異年齢集団による交流
- (3)生徒の諸活動についての連絡調整
- (4)学校行事への協力
- (5)ボランティア活動などの社会参画

「学校行事」

- (1)儀式的行事
- (2)文化的行事
- (3)健康安全・体育的行事
- (4)旅行・集団宿泊的行事
- (5)勤労生産・奉仕的行事

これらの活動を通して、時間の目標にある「望ましい人間関係を形成する」「集団の一員としてよりよい生活をつくる」「協力して諸問題を解決する」「公共の精神を養う」など、生徒たちが民主的な社会の形成者となるよう取り組むのが、「特別活動」の時間なのである。

(2)「特別活動」についてのクラス担任としての関わり方——「ホームルーム活動」を中心に——

①クラス担任と「ホームルーム活動」

クラス担任からすれば、生徒の「ホームルーム活動」は、「ホームルーム運営」となる。クラスは、偶然に集まった生徒と偶然にそのクラスに配属されたクラス担任で構成する偶然の集団だ。しかし、人は1人では生きていけない動物なので、偶然の集団の生活でもその生活をよりよいものにしたいと願う。また、偶然の集団への参加は、社会へ出れば人生のうちに何度も経験するものである。クラスという偶然の集団をよりよい生活ができる集団として作り上げていくことは、生徒が社会へ出てからの生きる力の土台を作ることにもなる。クラスでのよりよい生活を作る「ホームルーム活動」は、生徒にとって大切な活動だ。

しかし、よりよい生活は人によって内容が異なるから、何がよりよい生活なのか、生徒同士のすり合わせが必要となる。だが、すり合わせは

簡単に進むとは限らず、クラス担任が指導力を発揮してすり合わせがうまく進むように介入する。これが、教師の指導である。

とはいえ、最終的によりよい生活の内容を決め行動するのは、クラスの生徒である。クラス担任の強い指導でよりよい生活ができあがったように見えたとしても、最終的に生徒たちが自分たちの決断でよりよい生活の内容に合意していなければ、必ずどこかで破綻を来す。

このように、「ホームルーム活動」は、クラス担任としての指導と生徒の自主的活動との矛盾・対立の中に、クラス担任の「ホームルーム運営」を追い込むのだ。そして、この矛盾・対立を意識しながらクラス担任を務めることが、クラス担任教師に課された課題となるのだ。

②「ホームルーム活動」と「学校行事」

「ホームルーム活動」は「学校行事」とつながりながら進められる。ここでは、川崎市でA校につぐ進学校とよばれたB校での実践を振り返りたい。大事なことは、「ホームルーム活動」はクラス担任が個人としてかかわるが、クラスを超えて同一学年のつながりで行動する高校生の指導には、個々のクラスの「ホームルーム活動」においても学年クラス担任団の協働が追求されなくてはならないということだ。もとより、クラスを超えて実施される「学校行事」が、教師間の協働なくして成立しないことは言うまでもない。

B校の学校行事の流れをここで示しておく。

4月：入学式，1年生を迎える会（生徒会），社会見学（全学年）
5月：健康診断・身体体力測定，中間試験
6月：体育祭（生徒会）
7月：期末試験，球技大会（生徒会）
8月：保護者面談
9月：指定校推薦者決定（3学年），次年度選択科目決定（1・2学年），教育実習，文化祭（生徒会）
10月：中間試験，修学旅行（2学年）
11月：芸術鑑賞教室，落ち葉拾い

12月：期末試験，球技大会（生徒会）
 1月：業者模擬試験
 2月：学年レクリエーション（2学年），
 3年生を送る会（生徒会）
 3月：卒業式，学年末試験，
 球技大会（生徒会）

まずここから見えるように，B校での学校主催の行事は，入学式，健康診断・身体体力測定，保護者面談，芸術鑑賞教室，卒業式である。

つぎに大きな生徒会行事は，体育祭と文化祭の2つである。とくに体育祭は生徒の関心が高く，生まれ月ごとの異学年縦割り4色チーム対抗で，3年生がリーダー学年として1・2年生を指導し戦う形になっており，「色」の集団は3年間持ち上がるため団結は固い。教師は，「色」の顧問を担当するが，各「色」は「色」の伝統に則り自治的に動き，教師の介入する余地はほとんどない。B校の生徒の育ちは体育祭でつくられる，といわれる行事となっている。

文化祭は，クラスと文化部の取り組みが中心である。毎年クラス替えがあるので，クラスに伝統はなく，教師の願いや文化性がクラスの企画決定に影響し，クラスによっては飲食店をやりたい生徒文化と，飲食店以外の「文化」的な企画へ誘いたい教師文化のせめぎ合いが起こったりする。いずれにせよ文化祭の取り組みが，その後のクラスの質を変えることもあるほど，クラスにとって文化祭は大きな意味を持つ行事である。

3つ目の学年に目を向けると，何と言っても最大の行事は，2学年での修学旅行である。最近では沖縄や北海道など，人気コースは早いうちに航空機を押さえておかねばならないため，生徒が入学する前に宿泊施設などの大まかな修学旅行コースを決めてしまい，入学後に，生徒が修学旅行委員会を中心に細かい部分を決める形で，修学旅行本番を迎える形となる。本来であれば，旅行先を決めるところから生徒がかかわるようにすべきなのだろうが時代の流れでそう

もいかず，1学年の3学期から2学年の1・2学期のLHRの時間に生徒の修学旅行係が中心となって旅行準備を進める形での生徒参加の修学旅行準備となっている。また，2学年4月の社会見学は，修学旅行の予行として都内班別見学が行なわれた。

入学式や卒業式などの儀式的行事は，国旗・国歌法定以前は，フロア形式の式など各校ごとに工夫されていたが，法定以後，文部科学省・県教育委員会からの強い指導により，各校同一形式の卒業証書授与式となってきた。そういう中でもB校では，卒業生代表の人数や証書の受け取り方，卒業生の保護者へのあいさつの仕方など，いくつかの工夫をして同一形式内でありながらも，生徒・保護者・教職員が卒業を喜び合える形を追求してきた。

③「ホームルーム活動」の立ち上げ

4月は，クラス替えて全学年が新クラスとなる。クラス内の関係を穏やかに作り，生徒の心地よい生活空間を作ることが，クラス担任の仕事となる。新クラスの保護者とも良好な関係を作る時期でもある。クラス担任は，生徒の委員・係決めと保護者のPTA係決めを同時に進め新クラスの形を創り出す。

私は，週1回のクラスだよりを発行してきた。内容は，クラスの生徒と保護者への語りかけが中心である。生徒同士の心の交流と保護者への情報提供がクラスだよりの役割である。クラスだより第1号は，私の自己紹介と抱負の提示と決めている。

- ①生徒が主体的に動かすクラスにしたい，
- ②班日直制で日直と清掃の仕事を班単位で分担してもらおう，
- ③1学期と2学期に1回ずつ生徒面談を行ないたい，
- ④学期に1回ずつ保護者懇談会を開きたいことを伝える。

朝と帰りのショートホームルーム（SHR）の司会は，学級委員か日直班に担当させる。B校では，学級委員がクラスを仕切ることを徹底

させたかったので、学級委員が司会をする仕組みとした。学級委員が教壇に立ち、生徒の出席を取り、生徒に学校からの連絡事項を伝達する。

生徒にとって数少ないクラスの「仕事」は、黒板消し・号令かけ・学級日誌と清掃活動と冬場の灯油運びだ。私は、クラスの生徒を6～8人ずつの班に分け、黒板消し・号令かけ・学級日誌書きの日直の仕事と、各クラスに2～3か所割り振られた清掃活動と冬場の灯油運びを各班が1週間交代で担当するようにしていた。班内の人間関係づくりと孤立する生徒を出さないことが目的だ。

日直と清掃などの学校の仕事を、クラス担任が出席番号順に生徒を指名し分擔させているクラスが多くある。生徒1人ひとりが責任を持って仕事をするという責任感育成という良い面もあるだろうが、私は個人の責任を追及し個人を孤立させることは当該の生徒にとってもクラス集団にとっても生産的でないと考えている。助け合いの中で仕事をする方が人間関係力を高めると考え、班毎の仕事分擔とした。各班は「日直→休み→清掃①→休み→清掃②→休み→(日直)」のように週ごとに仕事を分擔するのだ。

B校の前に勤務したC校では、朝と帰りのSHRの司会も日直班の仕事として担当させた。「困難校」とよばれるC校では、中学校でクラス全体の司会を経験した生徒が少なかったため、司会を経験させるのが1つの目的だった。また、朝の遅刻者が多いC校では、日直としての点呼時に、遅れてきた生徒を遅刻扱いとするのかしないのかの判断権を持たせるのがもう1つの目的だった。いつも威張っている生徒が、いつも威張られている日直担当の生徒に頭を下げて遅刻を取り消してもらおう光景も見られ、人間関係の結び直しの意味があった。

④ロングホームルーム(LHR)の展開

ロングホームルーム(LHR)は、学習指導要領上、週1時間ずつ年間35回以上設定しなくてはならない時間である。学校行事と関わらせながら、生徒の良好な学校生活を作り出し、

友人関係を育て、学習や進路についての指導を行なう大切な時間である。

B校では、体育祭や文化祭や球技大会など生徒会行事が立て込む1学期から2学期半ばにかけては、LHRの多くの時間がそれらの準備にとられた。また、1・2学年では、次年度の選択科目の決定が9月のはじめにあり、とりわけ2学年には修学旅行もあるので、そこにも多くの時間をとられた。「総合の時間」とタイアップしながらのLHRの設定となっていた。

2学期半ばに学校行事が一段落すると、LHRの時間は、クラス担任と生徒が内容を自由に決められる時間になる。クラスごとのレクリエーションを組んでもよいし、他クラスとの対抗戦を組んでもよい。B校では、なぜかレクリエーションとしてバーベキューをすることが伝統となっており、週ごとにクラスが代わる代わるにバーベキューをかこむ姿が見られた。2学年では、翌年の体育祭幹部の選出も始まり、幹部を中心として「色」ごとの集会や学年レクリエーションとしてプレ体育祭なども行われた。また、「担任の時間」と称して、担任が自分の高校時代を振り返って卒業までを見越した生活の仕方を語ったり、日頃話したくても話せないことを語る時間とすることもあった。

⑤生徒面談と保護者懇談会・保護者面談

「ホームルーム活動」を円滑に進めるには、生徒とクラス担任との自然な関係づくりが大切だ。そのため、日頃からの生徒の観察と時に応じた声かけが大切だ。同時に構えて行なう生徒面談も重要だ。

私は、1学期の中間試験後の5月後半から6月にかけて1度目の生徒面談を行なうことにしている。クラスの生活や友人との関係が一段落し、生徒によっては生活上の問題が発生し、クラスでの成績的な位置がはっきりしてくるのがこの頃だからだ。面談時間は昼休み、面談会場は特別教室や生徒相談室など一般の生徒が来ない場所を使う。生徒には個人面談でも複数面談でもよいことを伝えておき、お茶を用意して待

つ。生徒の多くは、複数面談を希望し仲の良い生徒同士でやってくる。ここで話すことは、四方山話である。出身中学の確認、部活動の確認、困ったことなどを何気なく聞く。中間試験の結果を手元に置き、得意な科目や不得意な科目についての話もする。なんとということのない会話でクラス担任と生徒が何となく仲良くなり、クラス内の誰と誰が仲が良いかという生徒関係が確認できればよい。

2回目の生徒面談は、10月を過ぎた頃に行なう。同じ形で実施するが、その時の会話は卒業後の将来についてのことが中心になる。1年生は1年生なりに、2年生は2年生なりに、3年生は3年生なりに、将来について考えるきっかけ作りにする。またこの時期は、クラス担任の私との関係を煙たく感じてきただろう私にとっても付き合いづらい生徒にも切り込んでいける時期だ。「ぶっちゃけどうなの？」とこちらの本音をぶつけることで、付き合いづらい生徒が付き合える生徒に変わる貴重な機会とする。

保護者との関係づくりは生徒との関係づくりの土台である。学級だよりは、そのための重要なアイテムだ。週1回の学級だよりで、クラス担任の願いや思いや時々の生徒の動きを知らせると、保護者に学校への関心も湧き、保護者同士の共通の文化もできてくる。

こうした保護者同士が直接対面する場が学期1回のクラス保護者懇談会である。1学期は自己紹介と家庭での子どもの様子や子育て上の悩みの交流、2学期は進路の話、3学期は1年間のまとめと話に移る。保護者同士のつながりはそんな流れに乗ってできていく。

懇談会は、増刷りした学級だよりをもとにはじめに30分くらい担任の私から報告をする。報告の途中に、参加している保護者の子どもの様子を適度に盛り込む。体育祭や文化祭の後には、スライド上映も付けて報告をする。その後、保護者の司会で、参加者が一人ひとり語り出す。学校への質問や家庭での様子、子育ての不安がこもこも語られ、共有される。不参加の保

護者には、簡単な内容を次週の学級だよりで伝える。

保護者との個別面談も大切だ。私は、夏休みを使って、1人45分の面談をする。生徒同伴でもよいが、基本は保護者との対話である。保護者の出身地、子どものきょうだい関係や親子関係、保護者の職業など、話せる範囲で話してもらう。保護者とクラス担任が仲良くなることと、そこで知り得た家庭の情報を生徒との関係づくりで生かすことが目的だ。

「困難校」のC校では、生活上の厳しさを抱える家庭が多かった。こうした家庭では、生徒と保護者の関係が良好でない場合もあり、保護者面談の前に、「親に変なことは言わないで!」と生徒から訴えられることもたびたびあった。こうした家庭でも、保護者とじっくり話す中で子を思う親の気持ちが切々と伝わってくる。そして、「お前の母ちゃん、いい母ちゃんじゃん」と面談後に生徒に伝えられることは、クラス担任として何ものにも替えがたい特権だった。保護者とクラス担任が生徒を間にはさんで両側から生徒を支える関係、生徒と保護者とクラス担任の良好な三角の関係が、生徒の高校生活を下支えするという確信をこうした取り組みの中で持てるようになった。

⑥「学校行事」のつくり方

B校での体育祭が、異年齢集団の「色」ごとの自治的取り組みであることは、先に紹介したが、高校生が自主的自治的に自ら責任を持って集団的に活動することの持つ自己教育力のすごさは、例えようがない。授業も含め学校でのすべての活動が高校生の自主的自治的取り組みとして立ち上がり高校生の試行錯誤が保障される学校が理想的なのだろうが、効率をもとめる近代公立学校の基本的性格はそれを認めない。

そこで、せめて生徒の自主的自治的活動領域として残された生徒会活動や学校行事で、それを追求できるようにしたいと考えるわけだが、B校では、その舞台が体育祭だったわけだ。

また、文化祭はクラスごとの企画だが、そこ

でも体育祭同様に、クラスでの自主的自治的活動が展開する舞台となる可能性がある。クラスでそれを実現する手助け＝指導が、クラス担任の重要な仕事となる。

B校でも、生徒任せにすると文化祭企画は、飲食店などのお手軽企画に行き着くことが多かった。それも、文化祭実行委員の原案にもとづくLHRでのきっちりとしたクラス討論で決められるのではなく、生徒が思いついた企画を次々と思いつきで発言し、いくつか出された思いつきの企画案の中からその場で話し合いなしに多数決で決めるという安直な仕方では決めるのである。これでは、自主性自治性や文化性を高める取り組みのレベルにはたどり着けない。クラス担任は、生徒の顔をつぶすことなく生徒の安直な議論の仕方を一刀両断に否定することなく、そして生徒の自主性自治性に配慮しつつ、しかし、その文化性を高めようと働きかける課題を引き受けることになる。私のB校での文化祭についての実践をまとめた論稿をご覧いただければ幸いである。ⁱⁱ⁾

修学旅行の作り方についてはすでに述べたが、修学旅行は同宿し、同じ釜の飯を食べるという独特な学校行事である。退学する生徒の多いC校では、「修学旅行に一緒に行こうぜ！」と生徒に声をかけ、学校に魅力を感じていない生徒を学校に引き止める魅力あふれる行事として修学旅行を使った。また、保護者と旅行する余裕のある家庭が少ないC校では、飛行機に乗って美しい景色と美味しい食べ物が供される修学旅行を生徒のこれからの人生の上に大きなプラスの意味を持つものとして位置づけた。C校の教師たちは「修学旅行が大好きだ」と生徒の前で演じ、生徒を修学旅行に誘い、旅行後に、「同じ釜の飯を食った」ことを話題に生徒との関係を深めながら卒業期へと向かうこととしていた。

(3) 「特別活動」をつくる上で検討すべきこと

①授業と「特別活動」

授業と「特別活動」は、学校生活の両輪である。修学旅行や社会見学の内容と関係付けての授業展開や、「特別活動」の内容が授業内容をゆたかにすることも多い。「特別活動」を授業と別物と考えてはいけない。

②班活動としての、日誌書き・黒板消し・号令・清掃など学校の仕事

「ホームルーム活動」に、日誌書き・黒板消し・号令・清掃は欠かせない。この4つは、生徒にとって学校における数少ない「公の仕事」であり、クラス担任が、4月の最初にルール化しなくてはならないものなのだ。私はこの4つの仕事（私は号令をかけてのあいさつを好まないで私の場合は3つの仕事）を班に振り分けて活動することを始めのLHRで宣言する。

班は、4月当初は、出席番号順の班（40人クラスで6班程度）とする。班活動が6週間て1周すると班替えを行なう。仲の良いもの同士の班、くじ引きによる班など班のつくり方はいろいろあるが、学校ごとの生徒の様子にしたがって、生徒と話して決める。班が決まると班長を互選し、班長の指揮のもとに班活動が始まる。日直にあたった班は、1週間日直をする。朝と帰りのSHRの司会と出席確認・授業前後のあいさつのための号令かけ・授業後の黒板消し・日直日誌書きが仕事となる。日誌で面白いものがあると、それをコピーして学級だよりに掲載する。クラスに2～3か所割り振られる清掃も班毎に行なう。

A校とB校では、くじ引きでの班決めとなったが、C校では仲の良い生徒同士の班づくりを生徒が選んだ。C校の生徒は柔軟に友人関係を作ることが苦手なので、班は仲良い仲間の中で安心して過ごせる居住空間を保障する装置として位置づくことになった。生真面目な生徒の集まる班は、4つの仕事をきちんとこなすが、面倒くさがり生徒の多い班では、清掃をさぼる生徒が多かった。

そこで、C校での掃除さぼりの多い班への清掃指導は次のように工夫した。たとえば、月曜日に清掃をさぼった班員が1人いたとすると、翌日にその生徒は班長から担任の私と2人での清掃を命ぜられる。仲良し同士の班でも班長は互選で選んであり、班長の指示で班が動くことがあらかじめ確認されているので、命ぜられた生徒はたとえ日頃威張っていてもクラス担任と清掃せざるをえなくなる。そしてクラス担任としての私は、その生徒に「世の中助け合い、人に合わせることも大切」などと話しかけながら一緒に掃除をすることにしていた。

私は、班活動を、このような人間関係の結び直しの場として、公共心の育成の場として位置づけるべきだと思っている。

③班活動と「学校行事」

C校では、学校の仕事のみならず「学校行事」にも班活動を取り入れた。C校では、「学校行事」の仕事分担を、個人に分担するより班に分担した方が安心して取り組めると考えたからである。

まず、中学までにリーダー的な経験の少ないC校の生徒にとっては班長になること自体が、大きな意味を持った。「班長なんだから…」という私からの語りかけは、班長になった生徒の自尊心を高めた。私は、「学校行事」の準備が始まると、学級委員2人に加え班長6人を呼び集め班長会議を開催し、対策を議論する場としていた。そこで議論がまとまるとLHRでクラス全体に原案として提案しクラスの決定とした。そして「学校行事」に関わる仕事も班毎に分担するようにした。仲間と支え合うことによって自立していくC校の生徒にとっては、班活動は必須のものだと考える。

これに対して、A校やB校のような自立度の高い生徒の集団では、班活動で「学校行事」を進めることはなかった。班はなくても個人としてそれぞれの仕事を担うことのできる高校では、班活動に固執する必要はないし、班として活動することが彼らの感覚に合わないように思

えた。

④学級だより・学年だより

学級だよりは、ホームルーム運営に大きな威力を発揮するが、学年だよりも学年運営に大きな威力を発揮する。

学年だよりは、学年教師集団の合作だ。A校では、2学年から3学年にかけて月1号の発行を守った。巻頭言は学年主任が担当し、トピックに合わせて学年教師の誰かが交替で執筆する。学校行事に合わせての生徒原稿も掲載する。

P T A主催の学年保護者集会で報告役の教師は学年だよりをもとに報告をするから、保護者にも学年だよりが浸透する。学年単位での生徒-保護者-教師の関係作りに役立つのが学年だよりだ。

記事内容は、毎週の学年会で検討するから、学年クラス担任団の質も高まる。

おわりに

「総合の時間」と「特別活動」について、縷々述べてきた中で、確認できたことについてまとめたい。

1つは、「総合の時間」と「特別活動」（特に「ホームルーム活動」「生徒会活動」「学校行事」）は切っても切れない関係にあるということだ。おそらく「総合的探究の時間」に名前が変わってもこの枠組みは変わらないだろう。

2つは、双方とも学年クラス担任団の協働で実施しなくてはならない取り組みだということだ。生徒に最も近い位置で働く大人としての学年クラス担任団が、その内容や方法を考えることが理にかなっており、それでこそ生徒の育ちに直接責任が負えるのである。

3つは、教師の指導性と生徒の自主性自治性の兼ね合いを大切にすべきだということだ。「総合の時間」も「特別活動」も生徒が主体的に活動しなくては活動が成立しない。授業では、教師の話をも黙って聞いていればすむこともあるが、この2つの領域ではそうはいかない。生徒

に強制はしないがある方向へのベクトルは指し示す。生徒の自主性自治性は尊重するが、より高い文化性は求める。難しい課題だが、意識的に取り組むべきだ。

4つは、先に述べたこととも重なるが、教師集団も生徒集団も、話し合っことを進めることだ。効率をもとめる現代社会では、子どもも大人も回りくどい話し合いをしようとししない。どのようにすれば、話し合いの場が作れるのか、どのようにすれば、有意義な話し合いにすることができるのか、どのようにすれば団結した力を創り出せるのか、学校に教師として働く以上そのことを絶えず心にかけて働き続けなければならない大切な課題だと考える。

【注】

- i) 「普通科と総合学科の中間的な高校をめざして—神奈川県立A高校の学校づくり試案—」(高校教育のアイデンティティ, 教育科学研究会・小島昌夫・鈴木聡編, 国土社, 1996年)
- ii) 「子どもが生きる場としての学校—自治活動・行事・放課後—」(講座教育実践と教育学の再生第3巻学力と学校を問い直す, 教育科学研究会編, かもがわ出版, 2014年)